



Zambia

学校名: 埼玉県立常盤高等学校

氏名: 牛坂 留都

[担当教科: 看護]

- 実践教科等: 母性保健
- 時間数 : 270 分 (90 分 × 3)
- 対象生徒 : 専攻科 2 年生
- 対象人数 : 40 人

1 単元名

ザンビアの持続可能なジェンダー開発を考える。

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (国立教育政策研究所が例として示したもの)

- (1) 国際的な課題 (SDGs) の「教育」「健康と福祉」「ジェンダー平等」から、ザンビアの多文化共生を学び、課題を発見し、他者の意見を踏まえて、自らの考えをまとめられる。【批判・変容・統合】
- (2) ザンビアの教育・保健医療・文化や宗教から、ザンビアの女性の Ownership (自助努力) を踏まえた持続可能な支援策を考える。【統合】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点 (国立教育政策研究所・2014)

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る | 2 子供の多様な考えを引き出す |
| 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する | 4 考えるための教材を見極めて提供する |
| 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する | 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する |
| 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る | |

4 単元の指導について

(1) 教材観

本校は、看護師養成 5 年一貫校である。平成 26 年から文部科学省のスーパープロフェッショナルハイスクール (SPH) に指定されおり、看護専門職者としての自覚を促し、生涯にわたって看護の専門性を追求し続ける力を育成することを目標としている。

国際理解教育については、平成 27 年に JICA の出前授業、今 7 月に国際看護 (元海外青年協力隊員による講義 180 分) で、概論 (SDGs 含む) やラオスでの医療について学んでいる。

第 1 時では、埼玉県とザンビアを SDGs でつなげ、国際協力の必要性を身近に感じて欲しい。

第 2 時では、ザンビアのジェンダー開発を考えるジグソー活動を行い、資料により、イメージマップを考え、課題を見つけ、エキスパート活動により多角的多面的な解決策が考えられるようにしたい。

第 3 時では、在日外国人への看護を考えるために、母性実習で作成したパンフレットをベースに外国語のパンフレットを作成する。パンフレット作成においては、その国に医療を含めた基本情報を活かすようにし、グローバルな視点を踏まえながら、国際理解や看護に興味関心を持ち、今後国際看護の一員として活躍できるような素養を身につけさせたい。

(2) 児童生徒観

対象生徒は、5 年一貫校の 5 年目である専攻科 2 年生の生徒 40 名 (女子 37 名、男子 3 名) である。本学年は SPH の学年であり、プロジェクト学習を高校 1 年生から実践している。そのため、プレゼンテーション能力も高く、発問に対する回答も鋭い視点をもつ学年である。また生徒のうち 6 人は、文部科学省の「トビタテ！留学 JAPAN」でオーストラリアに行き、病院を視察した生徒である。また今クラスでは国立大学に編入が決まった者や助産師学校を希望する生徒も複数いる。このように国際看護・母性看護に興味がある生徒もいる反面、学校内には外国籍の生徒がおらず、病院実習でも日本人患者しか受持ちできないことが常であるなど、国際看護を身近に感じる機会は少ない。

そこで終業式後に事前アンケートを実施し、以下 (枠内) のような回答が得られた。

【事前アンケート (4 件法および記述式)】

- ① 国際協力に、興味が無い (6%、やや興味がややない 35%) 者が合計 37% を占めていた。
興味が無い理由: 自分には出来ない (英語・知識)。国内で働くから。
- ② ザンビアのイメージ: アフリカ大陸にある国。発展途上国。黒人。子どもが多い。水をくむのに時間がかかる。男尊女卑。教育が受けられない。文字が書けない。家事が主な仕事。エイズが多い。物資が足りない。栄養・衛生面に課題がある。貧富の差がある。
- ③ ザンビアの医療のイメージ: ナイチンゲールが現れる前の看護。医療の知識・技術が遅れている。

(3) 指導観

国際協力は、1978年アルマータ宣言のプライマリーヘルスケア（PHC）の考えに基づくものと考えている。PHCとは、自助と自決の精神に則り地域社会または国が、開発の程度に応じて負担可能な費用で、地域社会の個人または家族の十分な参加によって、彼らが普遍的に利用できる実用的で科学的に適正で、かつ社会に受け入れられる手順と技術に基づいて欠くことのできないヘルスケアのことである。この理念に則して、PHC4原則①住民の主体的参加②ニーズに指向性③資源の有効活用④協調と統合について、具体的に考えさせたい。

具体的な手法としては、埼玉県教育委員会と東京大学CoREFの「未来を拓く「学び」プロジェクト」の研究開発委員として、協調学習ジグソー法を用いて主体的対話的に深い学びを進めていきたい。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	・ジェンダーの課題を生徒同士で追究できる。 ・ジェンダー開発（課題解決策）を主体的に考える。	・ジェンダーの課題を生徒同士で追究でき、多角的・多面的に考察できる。	・ジェンダーの課題を読み取り、わかりやすく表現することができる。	・読み取ったジェンダーの課題を、多角的多面的に課題を捉えることができる。
評価方法	グループ学習 ワークシート 発問に対する生徒の受け答え 発表	グループ学習 ワークシート 話し合いの様子 発表	グループ学習 ワークシート 発表 聞く姿勢	グループ学習 ワークシート 話し合いの様子 発表

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	国際看護	概論 ラオスの医療看護	元海外青年協力隊員の方から講義を受ける。
2	埼玉県とザンビアをSDGsでつなげよう【統合】	ザンビアの国の基本情報（文化・食事）をSDGsから学ぶ。 国際協力の必要性がわかる。 ザンビアと日本の関係（JICAの活動）を知る。	埼玉県とザンビアのSDGs（フォトランゲージ） 都市部と農村部のちがい 昆虫食・シマ モノカルチャー経済 フェアトレード商品・エシカルファッション JICAの活動（ビデオランゲージ）
3	ザンビアの持続可能なジェンダー開発を考える。 【統合】SDGs5 	ジェンダーの課題は、保健医療だけで解決できるものではなく、国の経済や文化・宗教・教育などの多くの側面と関連していることに気付く。	ザンビアの教育・医療・文化（宗教）の観点から女性の自立を考える。 A；ジェンダーと保健医療（含むリプロダクティブヘルス・ライツ）＜保健医療＞ B；ジェンダーと幸福度 C；ジェンダーと教育 フォトランゲージを使った協調学習（ジグソー法）
4	在日外国人への看護（国際理解）	多様な価値観がある。 看護者としての多様な価値観を尊重できる。	6人グループで進めた以下の課題を発表する。 1）諸外国の文化・宗教・医療などの基本情報を調べる。 2）基本情報を活かして、パンフレットを外国語で作成する。

7 授業事例の紹介

小单元名【 ザンビアの持続可能なジェンダー開発を考える。】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月31日(火)第2限

(イ)実施会場 共通教室

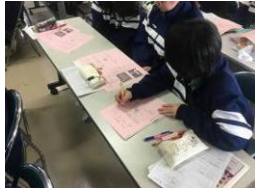
(ウ)本時の目標

ジェンダーの課題は、保健医療だけで解決できるものではなく、国の経済や文化・宗教・教育などの多くの側面と関連していることに気付き、対策を考えることができる。

(エ)指導のポイント

- ・協調学習(ジグソー法)により、主体的かつ能動的な学習となるように、効果的に発問を行う。
- ・フォトランゲージを用いて想像・共有することにより、多様な価値観があることを知る。

(オ)本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
前時 振り返り 2分 3分	私達にできる 国際協力 動画視聴 本時の目的 本時の流れ 言葉の定義	授業後アンケート意見より 復習をまとめた動画を視聴	全体	・視聴姿勢をサポート	【関心・意欲・態度】
15分	ザンビアの 医療 保健統計 ウイメンズヘルス【4】	PPTによる講義	全体	 写真: 講義の様子	【関心・意欲・態度】
展開1 15分	<エキスパート活動> 3人1グループに分け、資料(写真)を配布する。 【4】	・各資料から、現状と課題を知る。 資料A)ジェンダー平等 ⇒女性は家事育児という伝統的性別役割がある。 資料B)ジェンダー意識 ⇒両国の女の子に生まれてよかったことの違いを知る。 資料C)ジェンダーと教育(識字率・進学率) ⇒生まれた性別により、識字率や進学率が異なる。	エキスパート活動	・テーマ「教育」「医療」「意識」に関する資料を配布する。 ・話し合いをサポート  写真: エキスパート活動の様子	ワークシート活動の様子 【思考・判断・表現】
展開2 30分	ザンビアの持続可能なジェンダー開発を考える！！				
	<ジグソー活動>3つの異なる資料をもつグループとなり、資料の要約を共有し、課題を話し合う。 【2】	・自分の意見をワークシートに書き込む。	ジグソー活動	・話し合いをサポート	【知識・理解】

発表 5分	クロストーク (発表) 【3】【7】	ザンビアの「持続可能なジェンダー開発策」を発表し、様々な意見や考え方を共有する。	クロストーク	・発表姿勢をサポート ・発表に付随する知識をコメントする。	発表者【技能】 聞く側【関心・意欲・態度】
7分	丸森町プロジェクト(JICA草の根技術協力事業)の小野さんの映像 【4】	インタビュー動画の視聴 (ビデオランゲージ)	全体	・視聴姿勢をサポート	【関心・意欲・態度】
次回 5分	在日外国人の増加の現状【4】	在日外国人への看護の必要性を知る。	全体	・視聴姿勢をサポート	【関心・意欲・態度】
まとめ 5分	本時のまとめ 【6】	ワークシートの記入 (ジェンダー開発を個人で考える)	個人	机間巡視し、記入状況を確認していく。	【関心・意欲・態度】

(2) 授業の振り返り

<良かった点>

- ・1回目の授業までは、寄付する、募金をするといったことが、私たちができる国際協力と思っていた生徒が多かった。しかし今授業で、「それは持続可能な国際協力になりますか？」という発問を繰り返すことにより、「持続可能な国際協力」を深く考えることが出来た。
- ・「イメージマップ」を初めて導入したが、臨地実習で使用している病態関連図に近かったため、スムーズにマップ作成もでき、内容的にもジェンダー開発についてイメージを広げることができた。
- ・「国際協力」について、草の根技術協力(丸森町)の方のインタビュー動画の視聴を最後に行うことにより、生徒からの意見を広げる内容であったため、効果的であった。
- ・生徒たちの記述から、街で外国人をよく見かけるなどといった「関心」の高まりを感じた。

<改善点>

- ・指導案に盛り込んだ内容が多く、一部省いた内容もあった。
- ・「国際協力」のインタビュー動画の視聴は効果を感じたが、ザンビアで活躍する日本人を複数紹介すれば、もっと考え方を広げることができたのではないかと考える。
- ・男子生徒や深く考えることが出来ない生徒は、授業に積極的に参加するための、より積極的な効果的な発問や支援が必要であった。

(3) 使用教材

言葉の定義

- ・ジェンダー平等とは、男性と女性が同じになることを目指すものではなく、人生や生活において様々な機会が性別にかかわらず、平等に与えられ、女性と男性が同様に自己実現の機会を得られるような社会を目指すものである。
- ・開発：新しいものを生み出すことや、対象に働きかけて発展・向上させたり、人間の役に立つかたちに変えたりすること。

(医学書院 国際看護学より)

イメージマップとは

1人が産む子ども数(合計特殊出生率)

日本 1.44人

(2017年6月厚生労働省)

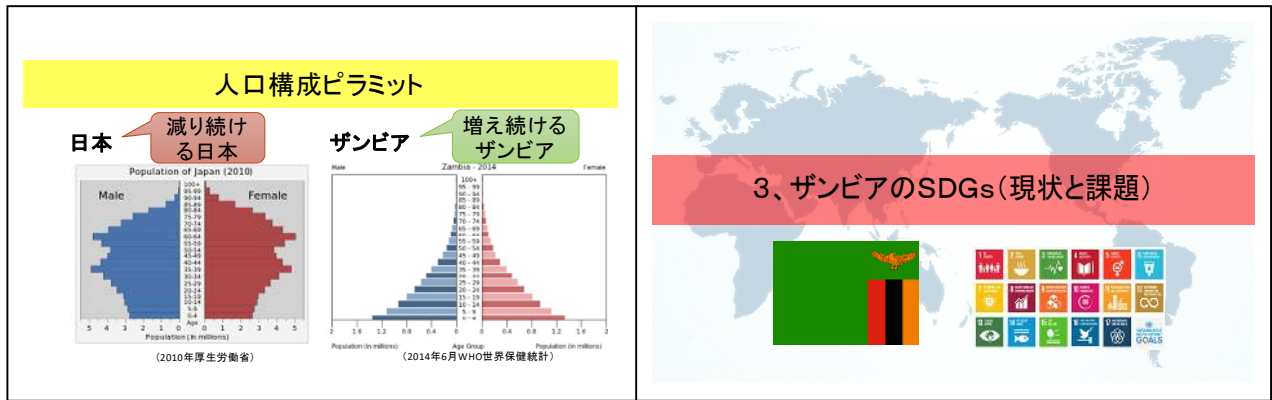
ザンビア5.04人

(2015年WORLD BANK)

プライマリーヘルスケアの4原則

・1978年アルマータ宣言

- 1、住民の主体的参加
- 2、ニーズの指向性
- 3、資源の有効活用
- 4、協調と統合



(4) 参考資料等

『ザンビア通信』 沼崎義夫 勉誠出版 2002 年

『開発とWID』 森川友義 新風舎 2002 年

『世界の産声に耳を澄ます』 石井光太 朝日新聞出版 2017 年

『系統看護学講座 災害看護学・国際看護学』 浦田喜久子他 医学書院 2017 年

『国際看護学 グローバル・ナースングに向けての展開』 南裕子監修 中山書店 2013 年

『知って考えて実践する国際看護』 近藤麻理 医学書院 2014 年

『国際保健医療のキャリアナビ』 中山安秀他 南山堂 2016 年

8 単元を通した児童生徒の反応/変化

国際協力・国際理解教育における第 1 回から第 3 回までの生徒の反応や変化を授業終了後のアンケートで得られた回答を記す。

授業1

- ・誰一人取り残さないためにも国際協力が大切だと思った。
- ・日本は昔も今も支援を受けている身であり、大変な時はお互いに助け合っていくことが必要だと思う。グローバル化した今、医療も国際協力が必要である。
- ・誰かのためでなく、自分のためにもなる！世界中で協力していくことが必要。

授業2

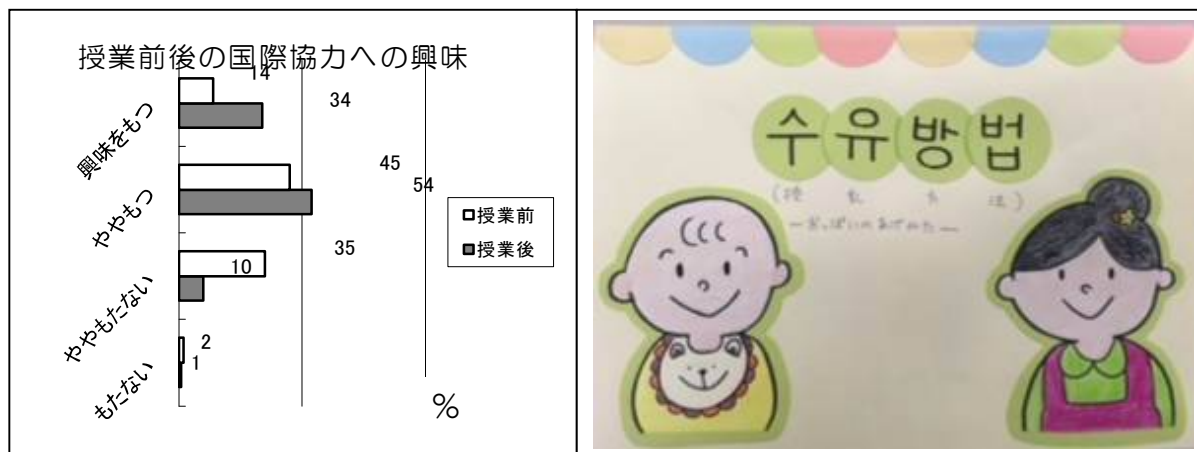
- ・物や金を与えるのではなく、現地の人に技術や知識を与えていけば、向こうの人たちが主体的に行えるようになる。そして発展を継続的に支援できることを学んだ。
- ・支援してあげるという意識ではなく、共に歩む・協力するという考え方や自分たちで生活を考えていける方法の提供が必要である。
- ・途上国・先進国という概念を超えて、困っている地域や国があれば協力していくという姿勢が、世界全体の発展や平等につながっていくと思う。
- ・同じ地球なのだから「外国」と分ける必要がないと思った。

授業3

- ・「海外に行く」だけでなく、海外の人が日本の医療機関に受診することが多くなっており、ニーズがあると思う。看護においても、お互いのことを知ることが大切だと思った。同じ人間として生まれているのだから協力しよう！
- ・日本はまだ国際的でない。島国時代は終わっていて、海外から日本に来ることが当たり前になっている今、相手を理解し、他国の文化などを大切にすることができなければ対応できないと思った。
- ・パンフレット作製のために、その国の文化や習慣について調べた際、日本とは異なる習慣や価値観があり、医療も文化に影響するため、国による医療の違い多くあることを学んだ。

国際協力以外の内容

- ・日本のジェンダー平等は、レディースデーとは変に目立ってしまい、男性からしたらズルイと思われるがち。もっと違う立場で女性に対等であるべき。例えば、男性の育児休暇の取得を増やしたり、変な感じにならないように浸透していくべきだと思った。
- ・「看護の対象は人である」「日本のやり方にこだわらない」「コミュニケーションの工夫」という言葉を聞いて自分の頭の中が変わりました。



9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P(計画)	・ザンビアと日本の女子生徒に「女の子に生まれて良かったこと」を計画した。 ・事前アンケートを実施し、生徒の興味関心をまとめ、研修での内容に活かした。
D(実施)	・具体物(最強の虫除けクリーム・フェアトレードのチョコレート・女性用避妊具など)や、視覚的教材(写真・動画)を多く用い、ザンビアの現状を伝えた。
C(検証)	・授業毎にアンケートを実施し、国際への興味関心や、国際協力へ考え方の変化を見た。 ・公開授業にあたっては、JICA職員 2 名、本校管理職、同じ研修に参加した教諭、本校教諭(看護・体育・英語)にも参観して頂き、御指導を頂いた。 ・同じ「未来を拓く「学び」プロジェクトの研究開発委員であり教師海外研修で一緒だった大野教諭にも御指導を頂いた。 ・生徒の中には、韓国語に興味のある学生も多く、流暢に話せる学生も何名かおり、生徒の興味関心を発揮する機会となった。
A(改善)	・海外研修中に現地と学校をZOOM cloud meeting を用いて、リアルタイムに繋いだ。しかし、授業実践の中でも現地の方(学生や協力隊員など)とつなげることが出来たら、より効果的であったと考える。 ・授業を時間内で終えるためには、伝えたい内容のみに厳選すること。

10 教師海外研修に参加して

国際協力や開発途上国に無縁だった私にとって、研修前は「寄付が美德」から抜け出せなかったように思う。今研修では、教育と医療を学ぶことを目的とした。初等教育は 6 歳からであり、通学距離・学校数・教員の問題など、日本と比較して多くの課題があった。しかし、どの生徒も一生懸命教員の話しを聞いており、そのまなざしは忘れられない。その一方、医療の課題として、5 歳以下の乳幼児の 2 人に 1 人が栄養失調や高い乳幼児死亡率が存在していた。

持続可能な社会の実現(ESD、北村 2016)によると、「人間の成長」は教育分野のことであるが、同時に「人間の生存」は保健医療・衛生の問題である。つまり、教育による人間の成長と同時に、保健医療・人間の生存があってこそその教育である。今研修では、学校だけでなく、病院や保健センターを見学する機会を得たことで、教育と健康が非常に近い存在であることを改めて認識させられた。このように、私自身が変容し、教育とは？医療とは？という考え方を捉えなおす良い機会となった。

日本では高校無償化も進み、高い識字率により教育は充実しているように見えるが、貧困問題・無国籍児・虐待・いじめなどの問題や事件も多い。ザンビアでは1日 1.25ドル以下の生活世帯が多いが、今を楽しんでいる様子を感じられた。日本は平均寿命が長い故に、今を一生懸命生きることを忘れていないのではないか、経済的に恵まれていても、心が貧しい(心の貧困)から自殺が多いのではないかと感じた。

人間はみな同じ可能性を持って生まれてくる。しかし、環境によりその人生は大きく左右されることをここまで感じる機会はなかったように思う。ザンビアから学んだことは多く、日本も考え直さなければならぬ課題も多い。3 回の授業実践後に、他教科(英語)の授業で「ザンビアに行きたい」と書いてくれた生徒がいたと聞いた時には、本当に嬉しかった。今後も国際理解や看護に興味関心を持ち、今後国際看護の一員として活躍できるような素養を身につけた学生を増やしていきたいと考える。